

〔自伝小説〕

# わが道を求めて (第八回)

指示待ち世代

長 崎 明

さしえ 竹内秀明

指示待ちの子ども

ちょっと間がとぎれて、すみませんでした。昨年の新潟市女性大会の分科会での話をしていたところでした。あいにく私がこの三月三十一日  
で新潟大学を定年退官ということもあって、何やかやの仕事や行事に追  
われて、こちらの方がお留守になったと思います。

前回は「今の子どもは指示待ちだ」との、ある私立高校の先生の発言  
がきっかけになって、会場の雰囲気俄かに盛り上がってきたというと

ころまででした。

その先生のお話は次のとおりでした。

教室に入って、「さあ、授業を始めますよ」といっても、大多数の生徒は、ただ座っているだけ。「机の上に教科書を出しなさい」というと、教科書を出す。「教科書の何ページを開きなさい」というと開く。特に私語したり、ふざけたりはしないが、万事の調子で「あれしなさい」、「これしなさい」といわないと、何もしようとしない。

と、いうのでした。高校の先生がこういう話をしたら、中学校の先生が「中学校の子どももそうだ」と応じました。続いて、小学校の先生が「小学校でもそうだ」と発言しました。これを「指示待ち世代」というのだそうです。

なるほど、小・中・高校の先生がたは、子どもと密着しているだけに、面白い言葉を考え出すものだと感心するとともに、私自身の子ども頃はどうだったかなど、忘却の彼方をさまよっていたのに、司会者の「大学ではどうですか」の声で現実に戻されました。

そこで、私自身の子ども頃の話は、また別のところで書くことにして、分科会での私の発言と、その後のことをご報告しましょう。

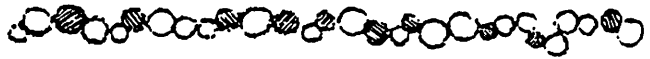
### 指示待ちの大学生

#### 親子分離不全症候群

これは、助言者としてではなく、一大学教師としての発言ですが、確かに大学も似たようなものですね。いくらでも例を挙げることができます。

数年ほど前からの傾向ですが、卒業式や入学式に父母の参加が非常に多くなりました。卒業式の方は、ご両親にとって、これで社会に送り出せるというので、いわば最後のはなむけであり、お祝いでもありましょう。ご両親だけでなく、兄さん、姉さん、場合によってはおじいさん、おばあさんまで、家族ぐるみでお出かけくださることもあろうと思われれますが、入学式の方は、要するに大学と新入生との間、いわば契約成立の儀式みたいなもので、そんなところにご家族がお出かけになる必要はない。それどころか、一人で送り出してやって然るべきでしょう。彼等はもう十八歳です。

十八歳といえば、私が両親のもとを離れて、大学受験のため台湾から内地へやってきたのも十八歳の時、一九四二年、昭和十七年の夏でした。当時、既



に敵の潜水艦が東支那海や太平洋を遊弋しており、民間の舟も撃沈されたとのうわさが広まっていました。それでも私は、大学に入るなら東京でと心秘かに決めていたので、両親に相談したのです。相談というより、決意を聞いて貰ったという形でした。両親にしてみれば、これが今生の別れになるかも知れぬという思いと、経済的な面での心配があったに違いありませんが、とにかく「しっかややって来い」と送り出してくれたのです。

その頃の内台航路は基隆港から下関港経由で神戸まで、四日三晩かかるのが普通でしたが、私たちの船は、約一週間かかって名古屋港に着きました。その間、夜も昼も船室に閉じ込められたままでした。でも、気が張りつめていたせいも、恐怖も淋しさも感じないのですね。

そうした私から見ると、あの入学試験の難関を突破してきた若者であり、これから私たちが教えなければならぬ大学生ではありますが、全くもってはなまちならぬ実態ではありません。

入学試験や入学式にご両親が随いて来られるのは、まだ良い方で、入学手続に事務室にまで入って来る。下宿の世話から、家具・日用品の購入に至るまで、

親がやっている。学生生協への加入手続も親が随っている。随いているというよりも、親自らやっている。

生協の受付の机の前で、新入生を挟んでご両親が両側に座って、係りの人にいろいろ質問している。生協に入るとどんな利点があるのか、入会・退会は自由なのか、卒業する時、入会金は返して貰えるのか、といった類のやりとりをやっている。当の学生ご本人はただ黙って座っているだけ。

生協ではフレッシュマン・セールの特売で机、椅子、戸棚、寝台、ふとん、冷蔵庫、テレビ等がズラリと並べてある。そのうえ、六畳から八畳の部屋を想定して、モデル的にレイアウトしたコーナーもある。それらの間を、一番前にお母さん、次にお父さん、最後に新入生がとぼとぼと随いて歩いているわけ。何がフレッシュマンかといいたくなる。

先日、このことをあるお医者さんに話したら、お医者さん仲間では「親子分離不全症候群」と呼ばれているのだそうです。

「親子分離不全」、なるほどお医者さんらしい呼び方だと感心しました。これには、子が親から離れられないケースだけでなく、親が子から離れられな

いケースも含み、最近は後者の方が多いうのだ、とのことでした。

でも、このご両親たちの気持、わかるような気もします。実は、私の子ども三人とも東京や大阪の私大に入れたのですが、とても、そんなに面倒を見てやれなかった。入学式だけ母親が出かけて行ったが、私、おやじは一人残されて、うろろ心配していた。家で心配していたって仕様がなかったんですが……。

こういう話をしているとキリがないのだが、分科会に出席している三十人ほどのお母さんがたが、盛んにあいづちを打ちながら、熱心に聞いて下さるので、私も司会者のお許しを得て、もう少し続けることにした。

### 指示待ち学生と歯車社会

さて、こうして入学した学生が、教養部で一年半勉強して、専門課程へあがってくる。ちょうど先程の高校と同じで、講義の時、教科書を開けといわれないと、あけようとしなない。この間、学生達の教科書をのぞいてみたら、きれいなもので、なんの書き込みもしていない。アンダーラインひとつ引いてない。

私は教科書を使いにはするが、教科書以外に私自身で研究したり、データを整理したりしたことを、随分と黒板に書いたり話したりするのだが、ぼやっと聞き過ぎていているらしい。二年次の期末試験で教科書以外の課題を出題すると、私が講義でどんなにしゃべったことでも、ほとんど回答できない。三年次になってやっと教科書以外のことでも少しは回答できるようになる。

それでいて四年次になると、もう卒業研究をすることになる。だから私は、私の研究室を希望して入ってきた学生に、その希望の理由、卒業研究でやりたいテーマを聞くことにしている。ところが、学生たちは、卒業研究のテーマは教授が与えてくれるものでも考えているらしい。もっとひどいのは、卒業研究のテーマを一人一人に与えるのは教授の仕事で、学生は教授の研究を請負わされるものと思っっているようだ。

研究室のコンパにしても、数年前だと、学生の方から「先生、そろそろやりますしょう」といつてきたものだが、最近は誰もいい出す者がいない。たまには、私がいずれを切らして「どうだ」とよびかける仕末。学生、きょんとんとしている。

私の小学校三、四年頃の教科書は、国語であれ、算術であれ、修身の本までが、ページの隅が数十枚にわ



たつて、人形や動物の絵が画かれていた。今でいうアニメのはしりで、ページの隅に少しずつ動きの違う絵を描いておいて、ペらペらとページをめくると、人形や動物が跳んだり、はねたり、逆立ちしたりする。もっと絵が上手だったら、私は手塚治虫くらいになっていたかも知れない。

今の学生は、教科書とはきれいにしておくものと、仕付けられているのだろうか。

でも、コンパやったり、花見に行ったり、一泊旅行に出かけたりしているうちに、学生一人一人の性格や生活状況が見えてくる。学生にも私の姿が見えてくる。でも、これは六〇七人相手だからできることで、四〇人学級さえ果たされていない今の小・中・高校では、気が回っても手が回らないのが実情であろう。

先ほど来、課題になっている指示待ち世代は、父母の責任もさることながら、学校教育の基本的欠陥に由来するのではないか。そうでなければ、大学は高校を、高校は中学校を、中学校は小学校を、小学校は幼稚園を、というように順番に誹謗<sup>ひぼう</sup>して、最後はお母さんのお腹の中(胎教)にまで戻ってしまう。それでは問題解決にならない。

こういう指示待ち現象が話題になる場合、「それは

国立大学入試の共通一次テストのせいだ」といわれるが、よしんばそうだとしたら、国立大学の入試制度が高校だけでなく、中・小・幼の教育にまで影響を及ぼす教育のあり方そのものが問題ではないか。

確かに、共通一次テスト実施以降、受験生の成績によって日本中の大学・高校・中学校がランク付けされた。受験生は偏差値によって「輪切り」にされて、大学に渡される。だから私はこれを「矢切りの渡し」ならぬ「輪切りの渡し」と呼んでいる。

しかし、さらに深く考えてみると、こういう現象を受け入れている社会自体に、既に「指示待ち」が蔓延しているのではないか。

### 指示待ちとファシズム

私があまり演説口調になったので、分科会の参加者が少しあっけにとられているようだが、決して悪い雰囲気ではなさそうなので、一息ついて、さらに続けることにした。私が言いたかったのは、次のとおりである。

我が国の歴史上、いまだかつてなかった高度経済成



長期に、馬車馬のようにただ働くことだけを習慣付けられた親達、一夫婦あたりの子どもを減らし、僅か一人、二人の我が子をマイホーム主義に育て上げてきた親達、その親達もまた気が付いたら、お釈迦様の掌の上に載せられた孫悟空のように、もがいても、もがいても、逃がられない存在になっていた。会社でも、役所でも、職場の機構が大きければ大きいほど、一人一人の構成員は、その全体像が判らないまま、歯車群の中の一つとしてただ回されてきたのではなかったか。

小さい歯車が、歯車として存在するためには、大き

い歯車からの力の伝達だけを果たしている方が、確かに楽である。なまじっか、その動きに抵抗すると、小さい歯車は潰されてしまう。結局のところ「指示待ち」に傾きがちになる。

子供の世界の「指示待ち」が話題になるのは、実は、大人の世界を映す鏡として、自分達の姿が、そこに見えてくるからではないのか。

中曽根前首相の提唱で始まった入試改革は、国立大学だけでなく、国公私立を含めた入試センターテストという形で来年から開始される予定で、ますますもって「指示待ち」傾向が広く深く子ども達を（実は親達を）スポイルするおそれがある。

この現象は戦前の軍国主義、ファシズムの社会に似ている。日本中の子ども達、そして日本中の親達が総指示待ちになったら、誰が「指示」を出すことになるのか。ほんの一握りの人が号令すれば、九九・九九の国民が「一億一心、火の玉」になるおそれがある。かつてのファシズムに道を招くおそれがある。

この道から脱却する道は、社会を構成する一人一人が、歯車社会の小さい歯車の一つ一つに甘んずるのではなくて、人間の自己の存在を見出し、力を合わせて自己主張する以外にない。私のような戦中・戦後派の

人間は、あの戦後民主主義の高揚期を、もう一度振り返りたいと思っている。

いま無理押しされつつある教育改革についても、小さい歯車の一つとして弱い所から見捨てられないように、一人一人がじっくり地に足を付けて検討してみる必要がある。

そこにこそ、本日のテーマ「子どもの未来と平和」のキーポイントがあるのではないか。

「一大学教師として」といいながら立ち上がったものの、助言者席から、一々うなずく万場の女性の皆さんと対峙した形でしゃべりはじめると、つつい助言者口調で、しめくりの弁を論じてしまいました。

後日、送られてきた女性大会記録を見たら、私の「迷演説」は、ほんの一言「助言者から意見があった」と述べてあるだけでした。

### 指示待ち論への反響

私は、自分自身を、それほどの物書きとは思っていませんが、それでも多少の学術論文を物してきました。自分が書いたものに対して何か反響があると、それが

賛否の何れであれ、存在感を認められた気がするものです。

実は、この女性大会での私の発言を少しまとめ直して、「松濤」という新潟大学農学部同窓会誌（一九八一年一月三〇日付）に投稿したところ、それを読んだ卒業生から次のような一文が届いたのです。

きびしい冬になるといわれているわりに、まだまだ暖かい日が続いておりますが、先生もますますお元気ががんばっておられるようで喜んでいきます。

私は農芸化学科卒業の農学部OBで、現在は上越の山の中で青年（？）教師のはしくれとして自分なりにやる気をもってがんばっています。

今回、松濤の先生の文章を読み、現在の私の心境にピッタリすぎて、びっくり、また喜びもあり、面識もない先生に手紙を出させていただきました。

現在の子どもたちには、私たち教師の指示に従って、その手のひらにのる、そんな子どもだけが良い子として認められていく学校社会があるだけです。

事あるごとに、「たとえ教師といえども失敗やおかしな事をいうことがある。子どもたちに無理じいさせる事もある。そんな時、しっかりと自分の考え

を大切にし、流されない人間になれ」と、生徒にも自分にも言いませせてはいるのですが、一方で押しつけなければならぬこともあって、ついつい混同、混乱することがあります。

生徒の中に生まれ出るエネルギーな活動、意欲を大切にしたいと願いつつ教壇に立つことが、今の自分の姿です。

乱筆、乱文ですみませんでした。お許し下さい。

二月二〇日

これだけの文章が葉書の一面にびっしりと丁寧な字で書きつづられています。

私は農業工学科の教授なので、農芸化学科卒業のこの先生は、この文章のように一面識もないはずで。その先生が私の文章に接して、切々たる心情を訴えてくれること、これがまた、私の教師冥利につきるしいです。折りを見て、本学の卒業生であるこの先生を是非お訪ねしたいと思っています。

### 私の幼年期と指示待ち

前回、私の子どもも、そのまた子どもも、自由活達

指示待ちとは全く無縁だと書きましたが、かくいう私は、子どもの頃わりと病気がちで、確かに身体的にはそれほど活動的ではありませんでした。

青白い顔で、痩せてチビだったので、家へ遊びに来た台湾の人が、つくづく私を眺めて、「この子ダメあるね。誰も買う人、いないね」といったという話を、かなり大きくなってから聞かされました。

でも、精神的には決して指示待ちでうじうじしていたわけでもなさそうです。一たん、思い込んだら挺子でも動かぬ頑固さは、幼年期から今日に至るまで、あまり変わらぬようですが、これも、自分の内面的自由を確保するために、他人からの指示を拒否するという意味で、指示待ちではなかったと自負しています。身体を動かすこと、とりわけスポーツは苦手でしたが、頭を使うこと、本を読んだり、つづり方を書いたりするのは大好きでした。

次回からは、そうした私の幼年期をたどって見ようと思います。

(ながさき あきら 元新潟大学学長)